

第二章 響流山勝福寺の歴史

勝福寺縁起 12

勝福寺歴代住職 18

第十七世住職 釋弘道

釋弘道 略歴 20

わが父 藤谷弘道 小伝 20

釋弘道 門徒葬 23

勝福寺年表 27



勝福寺縁起

渡辺浩晃

勝福寺と真勝寺

響流山勝福寺は實相山真勝寺（現・真宗大谷派四日市別院）の塔頭（本寺に付随し、その境内に所在し本寺を護持する寺）として歴史を刻んできた。それ故に、勝福寺の縁起を語るためには真勝寺、そして開基の出自である渡邊氏の由来から語らなければならない。

渡邊氏との関わり

1、松浦時代

日本全国が二つの勢力に分かれ互いに争った南北朝時代、肥前国平戸の松浦氏当主に松浦肥前守直がいた。南北朝の争乱は松浦氏においても例外でなく、松浦直は南朝方武将として畿内に上り、楠木氏に従い各地で武功を挙げた。

松浦直は南朝方武将として、摂津柳津・中村等を領したが、これらに加え豊前国高家郷常徳を恩賞として得て、地頭職に任ぜられた。

やがて南北朝時代は足利尊氏が奉じる北朝方勝利のうちに終焉した。松浦直は最後の決戦となった千早城攻防戦まで宮方に従い、落城とともに吉野に落ち延びた。ほどなく大内義弘の仲介によって北朝と和議を結んだが、本領・肥前国平戸は北朝方の立場となっていた松浦直の弟・松浦勝に譲ることとした。

2、四日市に定住

弟・松浦勝に本領を譲った松浦直は豊前国高家郷常徳に下向し、土着することとした。そして名を先祖代々の名字、渡邊に復姓し、官名も重代の左衛門府官職に改まり、渡邊左衛門尉直を名乗った。また現在の小倉の池湖畔に狐塚山城を築き、下館として現在の四日市上町に屋敷を置き、名実ともに渡邊直は豊前国四日市の祖となった。

渡邊氏はその後、大内義隆に仕え、代々周防大内氏の麾下として活躍した。大内氏滅亡後は豊後大友氏に仕え、宇佐平野を支配する「宇佐三十六士（宇佐郡三十六人衆）」の一つに数えられる有力士豪として活躍した。

真勝寺の始まり

天正年間（一五七三〜一五九三年）、渡邊氏二十一代目惣領 渡邊加賀守統述が家督を弟に譲って出家し、本願寺第十一代顕如上人に帰依して加賀入道専誉（専要）を名乗った。専誉は四日市の南方にある山本の虚空藏寺跡地に「専誉庵」を開き、この庵が真勝寺の前身となった。

戦国武将であった渡邊加賀守統述がなぜ出家したかについては、資料にその理由を見つけることはできないが、天正六（一五七八）年に大友氏と島津氏の間起こった日向国耳川の合戦に起因すると言ひ伝えられている。九州分け目の合戦とも言われる耳川の合戦であったが、大友勢は大敗し、渡邊氏も当主でもある専誉の父、



四日市別院本堂に安置されている専誉像

渡邊和泉守鎮弘しずひろが戦死する事態となった。当主戦死の状況を踏まえると、一族郎党の損害は想像に難くない。加賀入道専誉は後継として家督を継いだものの、戦乱の世に無常を感じ、出家したのだという。豊後国は島津氏の侵攻を受け、また北方からの毛利氏による圧迫にも晒さらされると、大友氏は豊臣秀吉に救いを求めた。これが豊臣政権による島津氏討伐となる天正十五（一五八七）年からの九州征伐に繋がっていった。

本願寺とのつながり

渡邊氏は大友氏麾下の勢力として活躍する一方、同時期に本願寺頭如と織田信長との間に起った石山合戦（一五七〇～一五八〇年）にも参戦している。石山合戦とは、全国制覇を目指す織田信長に抵抗し、石山本願寺に籠城する本願寺第十一世法主・頭如を中心にして全国の門徒が蜂起した戦いである。合戦は実に十一年の長きにわたって戦われたが、最後は朝廷の仲介で和睦に至り、頭如は石山本願寺を信長に明け渡した。（石山本願寺跡地には、のちに豊臣秀吉が大坂城を築城することになる。）

この石山合戦に、渡邊氏惣領家一族の渡邊次郎遠とほしが頭如に従い戦い抜き、紀伊鷲森御坊しゆもりまで同行していたことが史料より見て取れる。渡邊

氏は、専誉以前から本願寺との結びつきを持っていたのである。頭如は先述の九州征伐で豊臣秀吉に従って同行し、下関に滞在しており、これが専誉の頭如への帰依に結びついたものと思われる。

さて、出家や頭如への帰依との前後関係は定かではないが、専誉の開いた「専誉庵」は草創まもなく、戦乱の中で焼亡してしまった。天正六（一五七八）年に大友宗麟がキリスト教に改宗したことに端を発する寺社弾圧や、島津氏の領内侵攻で大友氏の支配が緩んだことによる豪族たちの蜂起により、宇佐平野が激しい戦火に見舞われる中で焼き討ちの憂き目に遭ったのだという。

専誉と良珍

兵火に追われた専誉は、一族で弟子となった良珍を伴い豊後国城島きしま（別府市）や田染たじぶ（豊後高田市）など在地を変え流浪しなければならなかった。はじめ宇佐平野の争乱に追われ城島に移り、次いで豊後府内を落とし北上した島津氏に追われ、渡邊氏の旧領で縁故のあった田染に移ったものであろう。

なお、この良珍こそ後に勝福寺開基となり、現住職の藤谷氏の祖先となった人物である。勝

福寺の住職は現在「藤谷」を名のっているが、それは明治時代に養子を迎え藤谷姓となったからであり、同家は良珍以来、渡邊姓を名乗っていたのである。

やがて豊臣秀吉の九州平定が成り、その後渡邊氏らが黒田如水・長政父子に対し起こした豊前国とくじん一揆も平定され、戦乱が収まる。

真勝寺道場と勝福寺の始まり

専誉は旧地豊前国常徳に帰還し、慶長五（一六〇一）年、真勝寺道場を建立する。ほどなくして専誉はこの世を去り、坊守の妙善尼が後を継いだ。このとき、専誉とともに帰還した良珍は寺役として真勝寺道場を支えていたが、やがて真勝寺塔頭としての勝福寺住持となる。これが響流山勝福寺の開山と考えられる。

真勝寺の誕生

さて、真勝寺道場には専誉の弟で渡邊氏惣領の渡邊左馬頭さなかみ統政むねまさの嫡男、正願しょうがんが養子に入り、妙善尼に続く三世住持となった。正願は学問の志深く詩歌、連句に長じ、晩年には渡邊氏惣領家の帰依も受け菩提寺して庇護を得た。門徒も急激に増えてゆき、当時開発されたばかりの四

日市集落に寺地を遷した。現在の四日市別院および勝福寺の地がこれにあたる。元和九（一六二三）年、正願は東本願寺第十三代宣如上人より寺号と親鸞聖人御影を申し受け、正式に「實相山真勝寺」を成立させた。以降数代に亘り、末寺二十二ヶ寺門徒二千余軒を抱える豊前国でも有数の大寺となる真勝寺が整備されていたのである。

勝福寺の御本尊

平成五（二〇〇三）年、勝福寺本尊を解体修理したところ胎内銘が出てきた。それによれば、建治元（一二七五）年に釈迦仏として造立され、九十一年後の貞治五（一三六六）年に修復されたとある。

今回、寺史を作成するにあたり、専門家に仏像や胎内の銘文を見てもらったところ、「作って百年にも満たないのに、修理するというのはよほど大きな事故か事件で損傷し、修理しなければならぬ事態になったのではなからうか。そして、この修理の時に阿弥陀如来に改められたかどうかは、これだけでは

判断しかねる」とのことだった。

勝福寺本尊は、かつて真勝寺の本尊として礼拝されてきた仏様と言いつつ伝えられているが、その造仏年代は、真勝寺はおろか専誉庵が開かれた年代を遙かに超え、鎌倉時代に遡ることがわかった。

造仏年の建治元年は、渡邊氏が豊前国常徳に來住する以前に肥前国松浦平戸にて水軍として活躍していた年代であり、修復年の貞治五（一三六六）年は渡邊氏が豊前国常徳に封ぜられた年と一致している。渡邊氏が松浦平戸氏を名乗り活躍する中で礼拝した仏様が継承され、豊前四日市に遷った現在も一族の菩提寺の本尊として仰がれているのである。

また造仏された建治年間には、大元帝国が襲来したいわゆる元寇の文永（一二七四）、弘安（一二八二）年間のはざまの時期である。文永の役において松浦平戸氏（渡邊氏）は当主が肥



前鷹島で自刃する程の壊滅的被害を被っており、ご本尊は一族郎党の菩提を弔うために造立された可能性がある。

勝福寺の御本尊は七百四十余年の渡邊氏一族の歴史をじつと見守ってきた仏様なのである。

さらに、勝福寺にはもう一つ小ぶりの阿弥陀像が安置されている。それはお内仏の阿弥陀様である。これも今回、専門家に見てもらおうと、「この阿弥陀像の方がより古く、鎌倉時代初期の制作であろう」とのことであった。

勝福寺開基の良珍が、専誉と共に戦乱を避けるため、城島や田染等を流浪した時に、この阿弥陀様は良珍の背中に負われた笈おひの中に納められて大切に守られていた阿弥陀様ではなからうか。

真勝寺騒動

元文二（一七三七）年ごろ、真勝寺第十代宗順の不行跡に端を発し、寺中・末寺を二分する騒動が起こった。

真勝寺塔頭勝福寺の了山をはじめとした門末と渡邊惣領家らは度々宗順をたしなめたが、行状は改まらなかつた。いつしか寺内、末寺は勝福寺了山をはじめとする寺中派と、宗順をはじめとする住持派に二分され、激しく争う様相と

なる中で、住持派は真勝寺塔頭の勝福寺及び福
円寺の戸ノ・寺役の停止・御絵讃卷物取り上げ
という強硬手段に出た。寺中派の人々は法善院
宗淳に解決策を仰ぎ、宗順を退隠させ、中津正
行寺の新発意を養子として新たに住持に迎える
べく願い出たところ、本山は宗順に隠居を申し
付けるとともに、真勝寺を抱寺として引き上げ、
住持を輪番制とする裁定を下した。

真勝寺を追われた宗順は森山・教覚寺の恵明
により改派し、六年ごとに行われていた宗門改
の際に西派僧侶であることを届け出た。そして
享保三（一七四三）年に至り真勝寺そのものを
真宗大谷派（東派）から本願寺派（西派）へ改
派することを企てた。

三月二日、西派僧侶が大挙して真勝寺に押し
入り、寺内で両派は問答を繰り広げた。寺は住
持の持ち物であり、宗順の改派を以て真勝寺は
改派したとする西派に対し、東派は、宗順は手
切れの僧であり、宗順の改派は真勝寺に関わり
がないとして真つ向から対立する様相になった。
やがて問答は境内全体を舞台とした乱闘となり、
西派が東派を力により追い落としとして占拠し、寺
および宗順と末寺が転派したものと称した。

日田代官所四日市陣屋と、九州を統括する幕
府の出先機関、西国筋郡代はこの状況を追認し
たため、東派は幕府にこの事態を訴え出た。

江戸幕府の裁きと別院の始まり

騒動は、ときの寺社奉行大岡越前守忠相の裁
断により幕を閉じた。寺跡は東派や西派でなく、
公儀に没収とされた。宗順らが八丈島へ流罪と
なるほか、西派の関係者が投獄され、獄死した。
この騒動は、のちに「真勝寺（別院）騒動」と
呼ばれることになった。

延享元（一七四四）年、真勝寺は東本願寺へ
御下付となり、「本山掛所御坊」となった。これ
が「九州御坊」と称し、全九州の七一六カ寺を統
括することになる「別院」としての始まりである。

独立寺院としての勝福寺

さて真勝寺が公儀召し上げとなり東本願寺に
下付された際、勝福寺はどうなったであろうか。
幕府は勝福寺と真勝寺を同一寺地と見なし、
真勝寺同様、公儀召し上げとする意向であった。
ところが年貢記録により、以前より独立した納
税が行われていたことが立証され、大岡越前守
忠相からもう一つの塔頭、福円寺とともに真勝
寺とは独立した寺院であることが認められ、召
し上げを免れたという資料が残っている。

明治二十三（一八九〇）年に政府が調査した

寺院明細牒の勝福寺の項にも「当寺開基は良珍、
本願寺十二代教如上人に帰依し今の地に一字を
建立し本宗の末寺となり、そして慶長十二（一
六〇七）年、当該法主より本尊・寺号を下付す
る所なり」とある通り、真勝寺騒動以前より勝福
寺は独立性をもった寺院として存在していたと
考えられる。

勝福寺と福円寺は、本寺が真勝寺から四日市
別院と変わり、それぞれが独立した寺となつて
も末寺や門徒を管理する塔頭であり続けた。

御許山騒動と東別院

幕末、宇佐郡内川野村の庄屋の子息に歌や国
学に秀でた佐田 秀という人物がいた。彼は勤王
の志士として討幕計画を練っていたが、これが
露見し西国筋郡代に追われ、長州の報国隊に身
を寄せていた。

慶應四（一八六八）年一月三日、鳥羽伏見の
戦いで官軍が勝利するや、同一月十四日、佐田
秀を中心にした豊前の草莽の志士達は藩政に反
発する長州藩士十八名と一緒に脱藩して浪士隊
を結成し、宇佐に舞い戻ってきた。

六十余人の浪士隊は四日市陣屋を襲撃し、大
砲や弾薬を奪って火を放った。世にいう「御許
山騒動」の始まりである。陣屋から四日市別院



慶応四年に炎上した四日市別院本堂の図面
(日田市の竹内工務店所有)

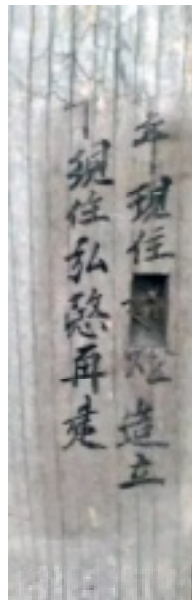
に逃げた役人たちを追った浪士隊はあろうことか、奪った大砲を横町筋から別院境内に打ち込んだ。重層で威容を誇った別院本堂をはじめとした諸堂、そして福田寺は灰燼に帰した。勝福寺はその渦中であつて運よく類焼を免れている。やがて浪士隊は御許山に錦の御旗を掲げ立て籠つたが、勅許なく、また無断で長州藩の名を用いた脱走者として長州藩兵により征伐された。

「義拳」の訴えも聞き入れられず「暴拳」として長州から征伐されたこの「御許山騒動」は、明治維新をめぐるあまたの悲劇の一つであるが、

そんな悲劇がこの四日市においても起こつていたということは感慨深いものがある。

勝福寺の本堂

ところで、御許騒動でも焼けなかった勝福寺本堂の建立年代は長らく定かでなかったが、平成六（一九九四）年からの改築の際見つかった棟木によると、第四代智燈「明和八（一七七）年寂」の建立になるようである。



創建時の本堂は間口が四間半、屋根は草葺であつたようだ。第十一代弘愍は弘化三（一八四六）年に改築を行い、草葺の屋根から切妻造の瓦屋根にしている。またこの時、手狭になつた本堂を広くするため、南側の屋根にひさしをつけて一間のばし、西側の半間の廊下を内に取り込み、外陣と内陣をそれぞれ半間ずつ広げている。さらに東側の廊下を取り払って庫裡との間にお内仏の間を設け、多くの門信徒が参詣できるようにした。この時、現在の形が出来上がったのである。

戦中戦後の勝福寺

第二次世界大戦末期の昭和十九（一九四四）年には、北九州市にあつた小倉陸軍造兵廠が爆撃を受け、移転先の一つとして四日市西方の糸口山に小倉陸軍造兵廠糸口山製作所が建てられた。勝福寺は本堂・庫裡とも軍に接收され、ここに勤労働員された鹿児島旧制第七高等学校・造士館生徒の宿舎となつている。

また終戦直後には、勝福寺は住宅難となつた人々の間借生活の場となつたり、住職の両親、姉弟が結核や病気で次々と死去したり、門信徒も自分の生活で精一杯という状態で、本堂を維持する力のない時代が続いた。

第二次世界大戦は田舎のお寺にも深い影を落とし、本堂・庫裏の荒廃を随分と早めることになった。

本堂の改修

急速に老朽化が進んだ本堂は、雨漏りで西側が朽ち、庫裏にいたっては、二階から降り込んだ雪が階段まで積もる状態であつた。

そうした中、高度経済成長で日本社会にゆとりができてきた昭和四十六（一九七一）年、門

信徒の力を結集して、ついに本堂庫裏の改修を行うことになった。しかしそれも予算的に限界があり、とりあえず雨漏りを防ぎ、窓をつけるという域を超えぬ工事であった。

昭和六十三（一九八八）年、第十七世住職（藤谷弘道）はその引退に当たり、本堂内陣の彩色を祈願した。門信徒の同意を得て仕上がった内陣は、創建時を超えるであろう見事なものになった。

ところが平成三（一九九一）年、数十年ぶりの大型台風となった台風十七号、十九号によって、本堂も庫裏も屋根瓦を吹き飛ばされてしまった。それを改修せんとするに、屋根地の痛みのひどいことが判明、ここに屋根を小屋組から一新する平成の大改修を行うことになった。工事は門信徒の皆さんの御懇念を受けて、平成六年から三年計画で行われ、平成八（一九九六）年十一月の総代会で工事の完成が報告された。

戦中戦後の勝福寺エピソード

1. 勝福寺の鐘も出征！

昭和十八（一九四三）年、戦局の悪化と物資の不足、特に武器生産に必要な金属資源の不足を補うため、宗教施設も例外ではなく、勝福寺

の鐘や仏具も供出させられた。

勝福寺の鐘楼は門徒の外園績氏の寄進によるものであったが、戦後、鐘がなくなった鐘楼は豊前の寺院に引き取られ、代わりに供出でなくなった本堂の仏具の寄進を受けた。

写真は供出のために宇佐郡の真宗寺院の鐘が、別院に集まった時の写真である。勝福寺の鐘は右から三番目の鐘である。



2. 勝福寺で卒業式

戦時中、勝福寺の本堂・庫裏には糸口山の陸軍造兵廠に勤労働員で来ていた旧制第七高等学校の生徒が寄宿していた。その生徒達は七高が空襲で焼かれたため卒業式ができず、卒業証書をもらえないままになっていた。

そのことが心残りであった彼らは卒業式をし

ようと話し合いを続け、戦後二十八年経った昭和四十八（一九七三）年、全国から五十五人が思い出の宿舎、勝福寺に集まった。

当時の教授五人も出席し、後藤弘毅教授（鹿児島大学名誉教授）が当時の浅野孝之・七高造士館長を代行して、羽織・袴の七高スタイルの卒業生に卒業証書を授与した。

このあと教授を囲んでコンパやファイヤーストームを行い、動員時代と同様に勝福寺の本堂にゴロ寝し、心ゆくまで若き日の思い出を語り合ったという。



勝福寺歴代住職

歴代住職についての詳細は、恥ずかしながらよく判っていません。父からかつて聞いた話では、真勝寺騒動の時の住職「了山」を初代とし、自分はそれから数えて十七代目だ、ということでした。「了山」を初代とするということは、真勝寺騒動により、真勝寺が幕府に没収され本山を抱えの四日市別院となった時をもって、勝福寺が独立した、ということになるかと思ひ

ます。

しかし、昔から内外で言い伝えられてきたのは、勝福寺は、専誉と一緒に出家して真勝寺を支えてきた「良珍」から始まるという話です。明治23年に明治政府がまとめた『寺院明細牒』にも「当寺開基は良珍、本願寺十二世教如法主に帰依し今の地に一字を建立し本宗の末寺となり、そして慶長十二（一六〇七）年当該法主より本尊・寺号を下付する所なり」となっています。

真勝寺騒動の際、大岡裁きによって、真勝寺は寺地もふくめて公儀没収となりました（一七四三年）。もしこの時、勝福寺が真勝寺から独立していなかったならば、真勝寺境内にあった勝福寺も寺地を没収されていたはずですが、しか

し、この時、勝福寺は独立寺院として認められ、公儀没収の対象から外されています。このことから、少なくとも了山の時には勝福寺は独立した寺院になっていたと思われる。

これらのことをまとめてみると、勝福寺の開基は良珍に違いないが、その頃の真勝寺はまだ小さく、勝福寺も真勝寺から独立する必然性がなかった。

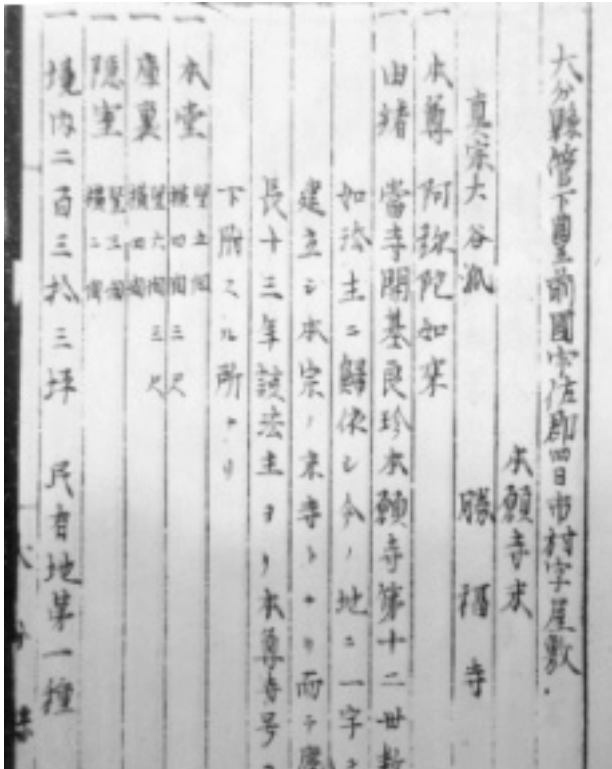
しかしその後、真勝寺が大きくなるに従って、真勝寺の塔頭であった勝福寺も大きくなり、それにより次第に独立性をもつていったのではなからうか。それが、真勝寺騒動の結果、真勝寺が四日市別院となったので、それを機に勝福寺は完全に独立寺院となった、と考えられそうです。

ちなみに、真勝寺が四日市別院になったということには、渡辺一族の寺であったものが大谷家の寺になってしまったという意味が含まれます。ですから勝福寺の独立には、真勝寺にかわって四日市を開いた渡辺一族の氏寺の役割を担うようになったという意味があります。

ともあれ、今の段階では、後に勝福寺となつていくその基を開いたのが「良珍」であり、真勝寺から完全に独立した勝福寺を開いたのが「了山」であった、ということになるかと思ひます。

今はこれぐらいにして、あとは後学の方の研究を待ちたいと思います。

（釋知道）



明治23年の『寺院明細牒』に記載されている勝福寺の由緒書き
(大分県公文書館・所蔵)

勝福寺歴代住職

代		法名	示寂年（和暦）	（西暦）		行年
1		了山			? ~ ?	
2		了祖	宝暦3年	1753	? ~1753	
3		靈岳	明和5年	1768	? ~1768	
4	樹花坊	智燈	明和8年7月13日	1771	? ~1771	
5		湛月	寛政8年6月8日	1796	? ~1796	
6		法恵	寛政8年	1796	? ~1796	
7		圓珠	享和元年5月2日	1801	? ~1801	
8		唯明	天保4年2月30日	1833	1760~1833	73
9		賢導	弘化2年10月12日	1845	? ~1845	
10		大愼	安政5年3月11日	1858	1827~1858	31
11	蓮乗坊	弘愍	安政6年7月19日	1859	1791~1859	68
12	信受院	圓備	明治35年6月2日	1902	1830~1902	72
13		円陵	明治42年	1909	? ~1909	
14		徳海	明治16年3月9日	1883	1842~1883	41
15	真正院	尋道	昭和15年2月28日	1940	1868~1940	72
16	真成院	昌道	昭和20年12月28日	1945	1915~1945	53
17	乘願院	弘道	平成25年9月6日	2013	1927~2013	87
18		知道			1948~	

*第12代円備は第11代弘愍の娘・恵津（明治25年4月18日逝去）の婿養子。勝福寺はもともと「渡辺」であったが、養子にきた円備から「藤谷」を名のようになった。

*第13代に数えられている円陵は円備の娘・知恵の婿養子であったが、「事故ありて送籍」とあり、離縁となったようだ。

*第14代に数えられている徳海は円陵の後にきた知恵の婿養子だが、わずか3年でなくなっている。

*その円陵は第13代、徳海は第14代として数えられているが、その間はまだ円備が健在であり、はたして住職をしたかどうか、はなはだ怪しい。

*ほかに第5代湛月と第6代法恵は共に寛政8年に亡くなっている。これはどういうことであろうか。

ちょっと見ただけでも疑問点があり、残念ながら、これをもって歴代住職系図と言いきれないように思う。

今は新しい資料が見つかることを祈るばかりである。（釋知道）

第十七世住職 釋弘道

略 歴

昭和二年 藤谷昌道・美保子の長男として生まれる。*姉・みどり、弟・覺道

昭和二十年 父、昌道、結核のため往生

*二十一年に姉、二十三年に母と弟が往生。

昭和二十二年 樋田彰子と結婚

*一男三女に恵まれる。

昭和二十二年 勝福寺第十七世住職に就任

昭和二十八年頃、昭和五十一年

日豊教区教区会議員

昭和四十年頃 西上町区長。小菊町の西上

町からの分離。東西上町の合併。青年団、子供会活動に力を入れる。

昭和四十六年 親鸞聖人七百回御遠忌法要

*記念事業 勝福寺本堂、庫裏改修

昭和六十三年 親鸞聖人生誕八百年・立教

開宗七百五十年慶讃法要

*記念事業 勝福寺本堂内陣修復

*勝福寺住職退任

平成二十五年九月六日往生 行年八十七歳

法名 乘願院釋弘道

わが父藤谷弘道 小伝

藤谷知道

勝福寺第十七世住職、釋弘道は藤谷昌道、美保子夫婦の長男として、昭和二年八月十二日に生まれました。姉にみどり、弟に覺道がいます。昭和十五年、ご門徒に生き仏のように慕われていたという祖父、尋道が往生。

この年、祖母マツエも往生しました。

昭和十九年、

宇佐中学の五年

生になりました

が授業はなく、糸口山に疎開してきた小倉陸軍

造兵廠に勤勞奉仕に駆り出される毎日でした。

昭和二十年、教えの十九歳で召集令状が来まし

た。善光寺駅から見送られる時、父から「戦争

はまもなく終わる。身体に気をつける」と言わ

れたそうです。宮崎県都城にあった部隊に入隊

するも、すぐ終戦となり、九月には四日市に帰っ

てきました。

帰ってきてみたら父、昌道が結核に罹ってい

て、十二月二十八日に往生してしまいました。

急遽、勝福寺の後を継がねばならなくなり、本



格的に仏法を学ぶ機会を失いました。それとい
うのも終戦直後は戦地からの戦死者の帰還が続
き、また食糧事情が悪化する中で病死する人も
多く、ご門徒の仏事への要求が強く、お寺を留
守にすることができなかったからです。結局、
四日市別院で行われていた「夏期学校」で教師
資格を取ったのですが、父は晩年まで、本意
なかたちで勝福寺の後継者（真宗の僧）に成ら
ざるを得なかったことを愚痴ていました。

母、美保子は若くして中風になり身体が不自
由でした。そのため結核になった父の看病は姉
のみどりがしていました。その姉にも結核が
うつり、翌二十一年に往生しました。お寺は女
手なくしては何事もままなりません。総代さん
の強いすすめで、昭和二十二年六月に樋田彰子
と結婚しました。そして、その二ヶ月後の八月、



満二十歳の誕生をまって勝福寺の第十七世住職
に就任しました。

翌年五月に長男、知道が生まれましたが、九
月には弟の覺道がやはり結核で往生しました。

そのショックでしようか、母、美保子が覺道の葬儀から日も置かずに中風の二度起こりで往生しました。こうして昭和十五年から二十三年の、わずか八年の間に、祖父母、両親、姉弟と六人の身内を亡くし、父は天涯孤独となったのでした。父の幼少期は恵まれた環境でしたのに、青春時代は全く逆で、戦争に翻弄され、家族との死別が続く過酷なものとなりました。父は次々と襲いくる人生の荒波をどう受け止めていったのでしょうか。

この頃、福岡県田川市のお寺に布教に来ていた高光大船先生を尋ねたり、異安心あつかいされていた福岡県二日市の正行寺に教えを聞きに行こうとしては止められたりした、と聞いておられます。結局、父は善き師に出遇うことができなかったようです。真宗の教えのわからぬまま住職を続けることが息苦しく、父は家族をおいたまま新しい職を求めて東京へ出て行きました。それは前後二度に及ぶのですが、晩年にはその時の武勇談を楽しそうに話しておりました。結局、住み込み先の主人に連れていかれたキリスト教の教会で自分は仏教徒であることを自覚したことや、その時すでに生まれていた二人の幼子が目に浮かんでならなかったことで、ともかく勝福寺の住職として生きていく覚悟をしたと言っておりました。

とは言っても、お念仏の心もわからぬ父には、お寺での生活は居心地が悪かったのでしょうか。あるいは宿業のもよおしでしょうか。お月忌参りを終えるや否や、遊びに出かけておりました。

わが家は母と四人の子供の母子家庭のような感じで、私たち子供は父を疎ましく思っていました。今になって思えば、子どもに嫌がられた父はどんなに寂しかったことでしょうか。本当に申し訳ないことをしてしまいました。

父はあきれるほどの自己中心的な人で、自分に良いことは他人も良い、と思ひ込む人でした。自分を客観化して見ることができず、思ったが最後、猪突猛進ちよとつもうしんしていききました。

父は「盆踊りのおっさん」で有名でした。私が小学生の時のことです。四日市小学校で懸賞盆踊り大会がありました。四日市婦人会の順番となり、揃いの衣装を着てご婦人たちが踊りながら出て来ました。プラカードを持った先頭の



一番左端が父 上町のご夫人らとともに

人の踊りはひとときわ勢いがあります。感心して見ていたら、なんとそれは女装した父ではありませんか。子どもながらも、恥ずかしさを通りこして呆れかえってしまいました。

また、若い時は『御伝鈔』ごでんしやうを抱えて教区内の寺々をお参りして回り、葬儀の時などは居場所がわからずに困った、と母が話していました。宗門にあつては、本山問題でご本山に乗り込んでいたり、教区に打診せずに押しつけた教務所長は認めないと山門にピケを張ったりと、みんなの先頭に立ってやっていたようです。

住職をしている間は、正月元旦だけが休みで、二日から大晦日までお月忌参りを欠かしませんでした。晩年は、両川地区のご門徒さんから分けてもらったゆずを日本中の知人に送っていました。大分のゆずは日本一と思ひ込んでいるようで、止めても止まりませんでした。とにかく何をやっても徹底的にやらずにはおれないようで、それが晩年の認知症に繋がっていったように思います。

ところで、戦争は勝福寺の建物にも大きな影響をあたえました。昭和十九年、糸口山へ小倉陸軍造兵廠が疎開してきましたが、勝福寺の本



堂、庫裏とも軍に接収され勤労働員された旧制七高の生徒の宿泊所となりました。この間、随分と建物が傷んだと聞いております。また戦時中には軍の供出命令で鐘楼の大鐘をはじめ仏具も供出させられました。父の住職としての第一歩は仏具を揃えることでした。

時代も上向きご門徒さんにも余裕が生まれた昭和四十六年、父が四十二歳になった春、親鸞聖人七百回御遠忌法要を勤めることができました。この時、土壁も落ち雨漏りもしていた本堂や庫裏の改修を行うことができ、お寺の戦後が終わったのではないかと思います。

父は、「おじいさんが長く住職をしたため、おやじの在職期間はわずかだった。おれは早く譲る」と言うのが口癖でしたが、昭和六十三年六十歳の時、勝福寺本堂の内陣を修復して、親鸞聖人生誕八百年・立教開宗七百五十年記念法要を勤め、あっさり引退しました。

引退の挨拶で「住職を四十年勤めてきたが、今日はいじめて善いことができた」と言い、満面の笑みで「それは次に住職を譲れたこと」と語ったことが忘れられません。次の



日からは、いくら頼んでも葬儀の導師を勤めようとはしませんでした。父にはそんな自分をかっこよく思うところがありました。それ以上に、住職の重責を全うできたという満足感、安心感からだったのだと思います。

住職引退後はそれまでの生活とは一変して、野菜作りや草取りをして一日を過ごしました。また小学校の同窓会を楽しんだり、母と二人で日本中をフルムーン旅行をしてまわりました。そのどれもが住職をしてい



る間は見向きもしなかったことでしたので、私達には不思議でなりません。きっと父は不器用な人で、二つのことを同時に考えることができなかったのでしょう。父は全てをなげすめて住職を勤めていたのだと思います。

八十歳になる前頃から、ちぐはぐなことを言い始めました。テレビで「水戸黄門」を見たあとの夕食時、「黄門様は四日市のどこで夕食を食べてるかの」と本気で心配したりしました。三年前からはテレビも見なくなり、デイサービスのお世話になるようになりました。昨年からは肺炎を繰り返してきましたが、三月末の肺炎で、アルツハイマー型認知症による誤嚥性肺炎

と診断され、ついに口からものを食べることができなくなりました。

今度の肺炎はダメージも大きく、二十四時間点滴で抗生物質の投与が続きなんとか一命は取り止めたのですが、ついに寝たきりの父になってしまいました。今後の治療方針を決めるための家族会議を開き、胃ろうはせず点滴によって、あたえられたいのちを全うすることに決めました。また先生の往診、訪問看護、訪問介護の支援を受けることができるというので、家に連れて帰り、家で最期を看取することに決めました。

認知症の父は、病気に苦しめられることも、死を恐れることもありません。文句も言わずただ静かに横になっているばかりです。呼びかけると、こちらをじっと見つめる父、その父を中心にして、この四ヶ月、四人の兄妹に、母と妻、叔母に姪、甥が、代わり番こで付き添いをさせていただきました。こうしたこと、父にとつては要らぬことであつたかもしれませんが、私達にとつてはゆつたりとした時間のおかげで、父から受けていたご恩の一端に触れさせていたできました。

父は今、娑婆の勤めを果たし終え、安んじて弥陀の本願に乗托し、いのちの故郷、安養の浄土に還って、仏と成られました。

八十七年の人生、ほんとうにご苦労さま。私たちを育ててくださり、まことに有り難うございました。

南無阿弥陀仏

乘願院釋弘道 門徒葬



葬儀式次第

- 一、出棺勤行 勸衆偈 短念仏 回向 我說彼尊功德事

- 一、法中入堂
- 一、導師入堂
- 一、論功伝達
- 一、開式の言葉
- 一、総礼
- 一、伽陀
- 一、導師焼香並びに表白
- 一、法中焼香
- 一、弔辞

- 本山弔辞 河野正巳様
- 勝福寺総代代表 向野順子様
- 勝福寺婦人会代表 上条大音様
- 法友代表 善了寺前住職 加藤真樹様
- お別れの言葉 孫代表

- 一、勤行 正信偈中読 短念仏 三重念仏 和讃 本願力にあいぬれば 添 正覚の 回向 願以此功德

- 一、葬儀委員長謝辞
- 一、遺族代表謝辞
- 一、閉式の言葉
- 一、恩徳讃
- 一、総礼
- 一、導師退堂
- 一、法中退堂
- 一、一般会葬者退堂

弔辞

勝福寺総代会副会長

河野正巳



勝福寺第十七世住職、藤谷弘道師のご尊前に勝福寺門徒を代表して、お別れの言葉を捧げます。

老御院家、あなたは勝福寺第十六世住職藤谷昌道師の長男として、昭和二年八月十二日に生まれました。幼少年期は門徒から生き仏のように慕われていたおじいさまの尋道師に可愛がられたとお聞きしています。

昭和二十年七月、数えの十九歳で召集されましたが、まもなく終戦。故郷に帰ってみれば、お父様は結核に罹って伏しており、十二月にはお亡くなりになりました。

終戦直後は戦地から戦死者の帰還が続き、食糧事情も悪化する中で病死する人も多く、京都へ仏法を学びに行くこともできませんでした。結局、四日市別院で行われていた夏季学校で大谷派の教師資格を取られたとうかがっています。

青年期は戦争に翻弄され、戦後はお父様とお母様、お姉様と弟様の死と、老御院家の青年期は考えただけでも大変なことでした。

そうした中、昭和二十二年六月、総代の強い勧めで老坊守様とご結婚。八月、二十歳になる

や勝福寺第十七世住職に就任されました。それ以来、坊守様の献身的なお支えを受けながら勝福寺の仏事を勤めるとともに、一男三女の養育に務めてまいりました。

ところで戦争は老御院家ばかりでなく、勝福寺そのものを巻き込んでいきました。昭和十九年、小倉陸軍造兵廠が糸口山に疎開してくるや、勝福寺の本堂と庫裏は軍に接収され、勤労働員された第七高等学校生の宿舍となりました。

あるいはまた、梵鐘をはじめ多くの仏具が軍の命令で供出され、仏さまのお荘厳もままならぬ状態となりました。

そのため老御院家の住職としての第一歩は、門徒さんをお願いして仏具を揃えることでした。また、本堂や庫裏の改修は、あなたが四十二歳になった昭和四十六年の春、親鸞聖人七百回御遠忌の記念事業として成し遂げられました。この時、やっとお寺の戦後が終わったのでしたね。その時とった記念写真に写っている門徒の顔には大仕事を終えた満足と深い歓びがあふれています。

老御院家の住職としてお勤めはお月忌参りを大切にされることでした。一年中、休むことなく門徒の家を一軒一軒お参りしてくださいましたね。お月忌の日でなくとも、「ちよつと、そこまで来たき、仏さんに参らせちよくれ」と、お内仏にお線香を手向けてくださる気さくなお方でした。

そして老御院家が六十歳になるや、「私に引退事業をさせちよくれ」と門徒をお願いして、

勝福寺本堂の内陣を彩色し直すとともに「親鸞聖人生誕八百年・立教開宗七百五十年記念法要」を厳修して、ご長男の知道師に住職を譲られました。本当に永いことご苦労さまでした。

住職引退後は、奥様とよくフルムーン旅行しておいででした。お月忌の折に、地図を見ながら旅行計画を立てるのが楽しい、と話しておいででした。

最近ではサービスを楽しんでいるとうかがっていましたが、今年の春先より誤嚥性肺炎を繰り返かえし、自宅でご家族の手厚いご看病を受けてこられていましたね。

その老御院家様も今は八十有余年にわたったこの世のお仕事を終えて、弥陀の本願に乘托して、いのちの故郷、安養浄土へ還り、仏となられました。これからはお浄土から私たちをお導きください。

私たち門徒一同は、現住職・知道師を支えて勝福寺をお護りしていくことをお誓いして、お別れの言葉といたします。

平成二十五年九月十日

お別れの言葉

勝福寺婦人会長

向野順子



勝福寺のご老院様と呼ばせていただきます。

ご老院様は私ども門徒衆のあまたのご先祖をお見送りくださいました。本当にありがとうございます。大変ご苦労さまでした。

本日は、ご老院様のご逝去の知らせをいただき、大変淋しくお別れの言葉を述べさせていただきます。

ご老院様は、在家の私どもの家にお月忌の日、お参りいただく折には「ちよつと、お参りさせてもらうで」とおっしゃって、まさに故郷の父にでも出逢うような気持ちでお迎えしたことを想い出します。

おだやかな笑顔とお浄土へゆかれたご先祖の橋渡しのようなこととお話いただいたり両親のことをお話し下さったりでした。

勝福寺に私がお世話になるようになったきっかけは五十数年前になるでしょうか、仏さまに飾る仏華のお手伝いをさせていただいたことからです。

花材になる「はい松」は和尚山かしやうざんの頂上に登って切り出し、その松の葉を袋に入れてかつぎだすのです。松が自然の枝ぶりになるように、はい松で枝ぶりをつくるのです。それを花瓶に立てていくのです。

生け花は安倍弥重先生、早田盛雄先生と私の三人の役目により仕上げていき、たしか三日間くらいかけての花立てをさせていただきました。仏さまの前に飾ると、ご老院様をご覧になって、今日の仏華は力強く生かしたなあとか、もう少し強い方がよいのではとか、生けあがったお花を評価していただくのが楽しみでした。

また、ご老院様はお寺の跡継ぎのことを案じていらっしやいましたね。そして若院様の継承法要の時の喜びの様子が今でも目に焼きついています。

想い出せば、次々と、走馬燈のように脳裏をよぎりますが、そうそう、ご老院様は盆踊りの上手な方で、阿波踊りの男役のような腰前で、とても楽しく踊っていらっしやいました。

あのとのお元気なお姿は「世の中安穩なれ、仏法ひろまれ」の教えを広く門徒の皆さまにお示しくださったのではないでしょうかと想い出されます。

お別れしなければならぬことは大変残念で淋しいことですが、どうかお浄土に参られても私ども門徒の行く末を、どうぞお導きくださいませよう、お願いもうしあげます。

私のつたないお別れの言葉とさせていただきます。

南無阿弥陀仏

平成二十五年九月十日

弔 辞

善了寺前住職

上条大音



勝福寺前住職 藤谷弘道様の御尊前に謹んで弔意を申し上げると共に 永年頂戴した親交と

ご厚誼に対し 篤く感謝のこトばを申し上げます。

あなたは優しく懐の深い奥様のもと 心配りの行き届いたご家族に守られて 残された日々を送っておられました。今このようにお別れの時がまいりましたことに ご家族皆様のご心痛いかばかりかとお察し申し上げます。

顧みますと 私共が若き日々を送った時代は 宗門が大きく変革されようとする時でした。古い体質から抜け出して真の自由主義に還るべく「家の宗教から個の自覚の宗教へ」をスローガンに同朋会運動が興り 大きなうねりとなっていた時代でした。

思い起こせば そのような時に 教区を憂い別院を愛するあなたは 本山の高压的な人事にまるで地方を無視するかのとき身勝手な人事に対し 自ら鉢巻きがけで別院山門前にピケを張り 教区有志と共にその入場を阻止するという大きな出来事がございました。あのあなたの行動に 同朋会運動の胎動と力強さを感じ 熱いものがこみ上げてきたことを 今でも忘れておりません。

一方 あなたは自由奔放磊落な気性の持ち主で 宇佐弁丸出しの話しぶりは誰に対しても変わることなく「そーじやろがえ たなーちこと 別院報恩講においでられた御連枝様にも大声で語るあなたは 誰からも愛されておりました。昭和四十年頃までは 毎月 何回も善了寺に遊びに来られ 家族共々夜遅くまで談笑しました。あなたのユーモア溢れる話に不思議な魅力を感じ

じ聞き入っていたものでした。

あれから随分と年月を重ね お互い歳を取りました。ご自宅で最期を迎えさせてあげたいとの配慮から自宅療養中のあなたを 先日お訪ねいたしました。こちらからの問いかけに全く応答のないあなたの掌をしっかりと握り「あなたと私は往くところは同じ 私が先かあなたが先かはわからぬが 善了寺 上条大音 わかるかえ」と何度も呼び続けると一瞬ピクピクツと私の手を握りかえし わずかに微笑んで涙を一粒落とされたのです。もう話もできず 通じ合うことはかなわないと聞かされておりましたので 本当に驚きました。そして嬉しかったです。

選挙好きだったこと 映画館で西部劇を見るのが好きだったこと 囲碁や将棋麻雀など勝負事が並外れて強かったこと 寝袋ひとつで諸国流浪の旅をしたことなど ひとつひとつ思い起こされます。

なごりは尽きませんが いよいよ今生のお別れの時が参りました。あなたから頂いた深い友情とご厚誼に 心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

別れをばさのみ嘆かぬ 今日の吾

おなじ御邦へ 往くと思えば

平成二十五年九月十日

老院さんの盆踊り

中園れい子

(四日市横町)



今年はお院さんのお初盆。お供養の盆踊りが行われた。ご門徒さんや地域の方々次々に輪になり、「ソラ、マツカセ、マツカセ」と踊りの輪が境内に広がっていった。

子どもの頃、地域の伝統行事が楽しみであった。その一つが盆踊りである。遠くから太鼓の音が聞こえてくると、その音色に誘われ、心弾ませながら出かけた。

多くの老若男女で盛り上がっている踊りの輪の中に、ひとときわ目立つ踊り手がいた。巧みな団扇さばきが宙を舞い、華麗で見事なステップを軽やかに展開しながら周りの人々をリードし、踊りの雰囲気一段と盛り上げている人がいた。

「ワァー！ 勝福寺の御院家さんじゃ！」 お転婆な私は大喜びで御院家さんの回りを走り回った。感動と興奮をしながら、真似をして踊ってみた。「盆踊りと



いえば勝福寺の御院家さん」―四日市では有名であった。

今は亡き老院さんをお供養する盆踊り。この踊りの輪の先頭を、老院さんが笑顔で踊っている姿が見えたような気がした。

御院家さんの真似をしながら踊った子供の頃を思い出しながら、「ソラ、マツカセ、マツカセ」……懐かしいお盆であった。

父の死を受け入れて

江藤弘子（三女）

早いもので父が亡くなってから百箇日が過ぎました。今日、母と兄と私で墓参りに行きました。私が、「父はお墓で淋しい思いをしているのではないか」と言うと、「そうではないよ。やっとな長い間会えなかった両親、姉、弟と、お浄土で再会できたのだから、きっと喜んでいよ」と、母は言いました。「そうか。きっと、そうだ」と私も思いました。今ごろは懐かしく色々なことがあったことを笑いながら話していることでしょう。

数年前から父が認知症になり、毎日デイサービスのお世話になっていたのですが、休みの日は家にじっとしているのが無理になり、私と父のドライブが始まりました。父は車に乗って山の景色を見るのが大好きで「山はいいな」「お前は車の運転がうまいな」「お前はいい子だ」と誉めてくれます。子どもの頃から誉められた

ことがなく、怖い父、母を怒る父でした。結婚しても家が近いのですが、顔を見るのも月に一度くらいでした。それが、認知症になってから人が変わったようになり、いつも「ひろこ、ひろこ」と言い、それから三年が過ぎました。

認知症がさらに進み、誤嚥性肺炎になり、四回の入院を繰り返しましたが、父の生命力はすごく、何回も「もう、だめだ」と言われながら復活していました。最後の入院で、食べると肺炎を起こすのもう食べることが出来ないと、先生から胃ろうの提案があり、家族で話し合いをしました。

胃ろうをすることは父を苦しめることになるかわかっているのですが、このままだと父は死んでしまう、父の命を子どもが決めてよいのか？ 父はまだ生きたいのではないか？ 私の気持ちは揺れました。兄や義姉が父を家に連れて帰ると言ってくれ、胃ろうはせず家族で看病することにしました。訪問看護やヘルパーさんなどのお世話になり、母、兄、義姉、私、姉たち、孫たち、皆で代わる代わる看病をしてきました。父は四ヶ月間、何もしゃべれずに、じっとベッドの上で寝ていました。私が泊まる日は、父の顔を見ては声をかけ抱きしめていました。今でも「ひろこ」と呼ぶ声が聞こえる気がします。三年間、父の側にいられてとても幸せでした。今は感謝の気持ちでいっぱいです。「父ちゃん、ありがとう」

門徒の皆様、今まで父をかわいがって頂き、本当にありがとうございます。

勝福寺年表

<p>元文二(一七三七)年</p>	<p>慶長十二(一六〇七)年</p>	<p>十四世紀から 十六世紀にかけて</p>
<p>真勝寺騒動おこる</p> <p>3月 真勝寺住職宗順の不行跡が表面化する。 4月 勝福寺住職了山、宗順に意見。真勝寺の門徒、末寺は宗順派と了山派に分かれ混乱する。 6月 宗順派より勝福寺と福円寺は戸々、寺役の差しめと御繪讀巻物の取上げを受ける。</p>	<p>「当寺開基は良珍、本願寺十二世教如法主に帰依し今の地に一字を建立し本宗の末寺となり、そして慶長十二(一六〇七)年当該法主より本尊・寺号を下付する所なり」 (出典 明治二十三年『寺院明細牒』)</p>	<p>真勝寺は、南北朝時代、肥前松浦から四日市に来住した渡邊氏が開いたお寺である。 その真勝寺の前身である「専誉庵」は、戦国時代に大友氏と毛利氏の熾烈な争いが行われた宇佐郡で、大友方の有力土豪として活躍した渡邊氏の一人、渡邊統述が出家して山本の地に開いたといわれている。 出家した統述は、本願寺第十一代顕如上人に帰依すると共に専誉の法名をもらい、戦国の騒乱を避けるため、弟子の良珍を連れ湯布院の城島や豊後高田の路などを流浪した。 太閤秀吉の九州征伐で戦乱が収まったので、専誉は常徳の地に落ち着いた。専誉の時代から良珍(勝福寺の開基)とその子孫は塔頭としてずっと真勝寺を支えた。</p>

勝福寺年表

<p>元文三(一七三八年)</p>	<p>11月 宗順は本山より「身持益々不埒につき」隠居を申し付けられる。真勝寺は本山の抱寺となり、以後、管理は輪番が行う。</p>
<p>寛保三(一七四三年)</p>	<p>宗順、西派への改派を企てる。以降西派の騒動が激しくなる。 5月 西派関係者が幕府に呼び出される。 12月 大岡越前守の御裁許</p>
<p>寛保四(一七四四年)</p>	<p>3月 宗順と教覚寺恵明は遠島、真勝寺は公儀没収の上、東本願寺に下げ渡され、掛所となった。 この時から勝福寺は独立した寺となったか。 勝福寺初代住職了山、東本願寺第十七代真如上人(一七〇〇-一七四四)より親鸞聖人御影を下付される。</p>
<p>延享二(一七四五)年</p>	<p>真勝寺騒動で残った直参御坊門徒のうち、勝福寺取次分は五百十六軒、福円寺は五百八十三軒とある。 (出典『四日市年代記』)</p>
<p>宝暦三(一七五三年)</p>	<p>勝福寺第二代了祖入寂</p>
<p>明和五(一七六八年)</p>	<p>勝福寺第三代靈岳入寂</p>
<p>明和八(一七七二年)</p>	<p>勝福寺第四代智燈本堂建立</p>
<p>寛政八(一七九六年)</p>	<p>勝福寺第四代樹花坊釈智燈入寂</p>
<p>享和元(一八〇二年)</p>	<p>勝福寺第五代湛月入寂 勝福寺第六代法恵入寂</p>
<p>天保四(一八三三年)</p>	<p>勝福寺第七代圓珠入寂 勝福寺第八代唯明入寂(七十三歳)</p>

勝福寺年表

天保五(一八三四年)	勝福寺円観咸宜園入塾
弘化二(一八四五年)	勝福寺第九代賢導入寂
弘化三(一八四六年)	本堂改築(葺葺きから切妻造の瓦屋根へ)
嘉永六(一八五三年)	第十一代弘愍「親鸞聖人伝絵」を敵如上人(第二十一代法主)より下付される。
安政五(一八五八年)	勝福寺第十代大慎入寂(三十一歳)
安政六(一八五九年)	勝福寺第十一代蓮葉坊釈弘愍入寂(六十八歳)
慶應四(一八六八年)	1月 御許騒動で東御坊御堂、庫裡、福圓寺焼失する。 勝福寺第十四代徳海入寂(四十一歳)
明治二(一八六九年)	勝福寺第十四代徳海入寂(四十一歳)
明治三(一八六九年)	勝福寺第十四代徳海入寂(四十一歳)
明治十(一八七七年)	勝福寺第十四代徳海入寂(四十一歳)
明治十二(一八七九年)	勝福寺第十四代徳海入寂(四十一歳)
明治十三(一八八〇年)	勝福寺第十四代徳海入寂(四十一歳)
明治二十(一八八七年)	勝福寺第十四代徳海入寂(四十一歳)
明治二十三年(一八九〇年)	明治二十三年に明治政府が調査した寺院明細牒の勝福寺の項に「当寺開基は良珍、本願寺十二世教如法主に依し今の地に一字を建立し本宗の末寺となり、そして慶長十二(一六〇七)年当該法主より本尊・寺号を下付する所なり」とある。
明治二十七(一八九四年)	第十二代圓備、四日市別院本堂再建に尽力した功勞により第二十二代現如上人の御染筆による十字名号と木盃を拝領する。
明治三十五(一九〇二年)	勝福寺第十二代信受院釈圓備入寂(七十二歳)
昭和十五(一九四〇年)	門徒の外園續氏梵鐘并に鐘樓寄進 勝福寺第十五代尋道入寂(七十二歳)

勝福寺年表

昭和十八(一九四三年)	戦局の悪化と物資の不足、特に武器生産に必要な金属資源の不足を補うため、宗教施設も例外では無く、勝福寺の梵鐘や仏具なども供出された。
昭和十九(一九四四年)	勝福寺の本堂と庫裏が軍に接收され、学徒動員で小倉造兵廠糸口山工場に動員された第七高等学校の学生の宿舍となる。
昭和二十(一九四五年)	勝福寺第十六世昌道入寂(五十三歳)
昭和四十六(一九七一年)	4月 親鸞聖人七百回御遠忌法要 *記念事業Ⅱ本堂庫裏の改修
昭和六十三(一九八八年)	4月 宗祖御生誕八百年・立教開宗七百五十年慶賛法要並びに住職継承法要 *記念事業Ⅱ内陣の荘厳を一新 8月 勝福寺寺報『響流』発行 10月 「同朋会」定例法話開始。 11月 第一回上山奉仕九名参加
昭和六十四(一九八九年)	5月 第二回上山奉仕九名参加
平成元(一九八九年)	境内排水施設並びに庫裏(隠居部屋)の増築
平成二(一九九〇年)	4月 第三回上山奉仕八名参加
平成三(一九九二年)	2月 在家報恩講を始める。 9月 台風十九号で本堂と庫裏の屋根や掲示板などが被害を受ける。

勝福寺年表

平成四(一九九二年)	5月 第四回上山奉仕 八名参加
平成五(一九九三年)	5月 第五回上山奉仕 九名参加 6月 御本尊修復
平成六(一九九四年)	1月 参詣者トイレ新築並びに下水道工事 1月 本堂屋根大修理並庫裏改修工事の趣意書ができ、地区の説明会が始まる。 9、12月 庫裏改修工事
平成八(一九九六年)	1月 遷仏式 2月 本堂改修工事着工
平成九(一九九七年)	1月 「定例法話を「日曜法座」と改名 8月 写経の集いや同朋会、日曜法座始まる。 10月 蓮如上人五百回御遠忌法要本堂庫裏落慶法要 *記念事業Ⅱ本堂庫裏大改修
平成十(一九九八年)	4月 宇佐組「蓮如上人五百回御遠忌」団参 吉崎御坊参拝
平成十一(一九九九年)	5月 山陰山陽の旧跡巡拝、妙好人を訪ねて
平成十二(二〇〇〇年)	12月 勝福寺仏教婦人会発足
平成十三(二〇〇一年)	2月 「日曜法座」を改め「御名を聞く会」として再発足 10月 別院山門修復工事始まる 11月 第一回仏教婦人会研修旅行 白杵方面 二十五名参加

勝福寺年表

平成十四(二〇〇二年)	3月 別院山門修復工事竣工 3月 「日豊教区・四日市別院蓮如上人五百回御遠忌法要」
平成十五(二〇〇三年)	7月 第二回仏教婦人会研修旅行 柳川白秋邸・石橋美術館 三十二名参加
平成十六(二〇〇四年)	隣家(旧渡辺久子邸)の寄進(講師部屋、物置、後継者の生活空間として利用予定)
平成十七(二〇〇五年)	11月 第三回仏教婦人会研修旅行 金子みすずを訪ねて 二十八名参加
平成十八(二〇〇六年)	7月 勝福寺仏教婦人会を「かはづの会」とする。
平成十九(二〇〇七年)	5月 勝福寺婦人会、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け奉仕団
平成二十(二〇〇八年)	5月 第四回勝福寺・かはづの会合同研修旅行 (別府・久住方面) 四十五名参加 8月 終戦記念日に、平和を願って「平和の鐘を撞く集い」を始める。
平成二十一(二〇〇九年)	1月 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け百日聴聞会始まる。 5月 「写経の集い」始まる。
平成二十二(二〇一〇年)	4月 岡本朋行氏、法務員となる。 6月 第五回勝福寺研修旅行 宝光寺参詣(玖珠町)住職法話 わらべの館 小鹿田焼窯元 二十一名参加

勝福寺年表

平成二十三年(二〇一一年)	<p>4月 ご本山での「宗祖親鸞聖人七百五十回御縁忌法要」への宇佐組の団参に参加</p> <p>8月 福島の子供たちを放射能から守ろうと湯布院に福島の親子を招待する「ゆふわく」に参加</p> <p>10月 福島の人々へ大分の農産物を送る活動が始まる。</p> <p>11月 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け百日聴聞会、百回満了</p>
平成二十四(二〇一二年)	<p>7月 第六回勝福寺研修旅行 鹿児島県「隠れ念佛」の史跡と知覧の「特攻平和記念館」 二十二名参加</p> <p>8月 共同墓「俱會一處」を建立</p>
平成二十五(二〇一三年)	<p>3月 「勿忘(わすれな)の鐘」を撞く集いが始まる。</p> <p>9月 第十七世住職 藤谷弘道往生</p>
平成二十六(二〇一四年)	<p>4月 「はじめの一步」が始まる。</p> <p>7月 第七回勝福寺研修旅行 長崎県：原爆資料館、浦上天主堂、九十九島遊覧、伊万里焼 三十八名参加</p> <p>8月 前任職弘道の初盆会並びに盆踊り</p> <p>12月 庫裡台所並びに玄関改修工事</p>
平成二十七(二〇一五年)	<p>4月 岡本朋行氏、法務員を辞し、自坊に帰る。</p> <p>11月 寺報編集委員会を結成。勝福寺寺報「響流」を「ひびき」に改称し七十九号を発行する。</p>

勝福寺年表

平成二十八(二〇一六年)	<p>4月 藤谷信・村田風氏が法務員となる。</p> <p>4月 日豊教区・四日市別院「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」法要 勝福寺より御遠忌団参 90名 帰敬式受式 29名 稚児参加 28名</p> <p>7月 熊本地震被災地支援・宇佐組有志と合同で第一回「炊き出しボランティア」</p> <p>8月 藤谷信、お寺でジャズ</p> <p>9月 総代会で勝福寺でも「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」を勤めることを了承</p> <p>11月 第八回勝福寺研修旅行 伊方原発見学と伊予松山散策の旅 二十五名参加</p>
平成二十九(二〇一七年)	<p>4月 「ミンダナオ子ども図書館」の子ども達との交流が始まる。</p> <p>9月 御遠忌委員会結成</p> <p>10月 御遠忌テーマ決定</p>
平成三十(二〇一八年)	<p>1月 「福島の人々へ大分の農産物を送る会」七十二回で活動を終了する。</p> <p>2月 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け聞法会が始まる。</p>
平成三十一(二〇一九年)	<p>4月 藤谷信・藤谷風氏、法務員を辞す。</p> <p>4月 江本真人氏が法務員となる。</p> <p>4月 臨時総代会にて御遠忌計画案を承認</p> <p>8月 内陣荘厳修復終了(はせがわ美術工芸)</p> <p>10月 お待ち受け聞法会、第二十回にて終了</p> <p>11月 響流山勝福寺 宗祖親鸞聖人・恵信尼公七百五十回御遠忌法要厳修</p>